
あなたの部屋に神隠し

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの部屋に神隠し

【Nコード】

N2081BA

【作者名】

森永パピ子

【あらすじ】

とある温泉地に赴任した訳あり小学校教師の俺、池畑昂志は、地元の銭湯の看板娘・湯本雪絵さんに想いを寄せている。ある夜銭湯の帰り道、雪絵さんの声に呼び止められて、辺りを見回すと段ボールの中に十五センチほどのミニチュアになった彼女がいた。そのうえ神様っぽい狐耳の巫女服幼女まで現れて、ミニチュア雪絵さんをお持ち帰りすることに。夢？ 幻？ いやいや。先生、普通の恋がしたいです。

恋の異常現象！？

「お疲れ様です。池畑先生」

「こんにちは。お疲れ様です」

三ヶ月前に大都会の小学校から一身上の都合により、とある田舎の少人数制の小学校に赴任し、山猿子猿の相手で疲れきった俺に、春の太陽のように麗らかな笑顔を向けてくれたのは、古臭い銭湯に咲いた一輪の花、湯本雪絵さん。

誰だ今、湯の花つて思ったヤツ。雪絵さんをあんな洗面器に浮いた垢みたいな物質と一緒にするな。彼女を例えるならば、綻び始めた芍薬。未踏地の新雪。春の小川。真冬の月。明けの明星。うーん。この感動を全く言葉にできない。

雪絵さんの実家である風呂屋・湯本は源泉かけ流しが売りのオールドスタイルな銭湯で、今だに150円という某安売りの殿堂も歯が立たないだろう破格値を維持している。知る人ぞ知る鄙びた温泉地であり、利用者の殆どが地元民であるこの土地ならはだ。少し遠いが某有名すぎる避暑地に比べて知名度の低さと言ったらない。

カウンターの脇には七十円の超薄超小型石鹸や一つ五十円の二回使えたらいいようなミニチュアのリンスインシャンプーが入ったプラスチックの網籠なんか置いてある。常連客は近所の爺さん婆さんが大半で二十七歳の俺が最年少だ。

中は広々青タイル。富士山なんて小細工はないし、洗面器は黄色いケロオン印。シャワーなんて洒落たものはなく、赤と青のポッチがついた蛇口のみ。ものっそアツツイ源泉か、ものっそツツメタイ水のセルフサービスだ。

そんな風呂屋・湯本でいいお湯を頂き、雪絵さんと神田川のシチュエーションになったら、俺の洗い髪が芯まで冷えても構わない！
と思いつつながら、暖簾をくぐり、二つ目の電柱に差し掛かった時。

「先生！」

不意に呼び止められた。

「え。雪絵さん……？」

振り向いたが、薄暗い夜道には誰もいない。

おかしい。

確かに幻聴レベルの小さなボリユームだったが、今のはたしかに雪絵さんの声だったような。

「先生！ 池畑先生！」

お化けや妖怪の類は全く信じていないので、その可能性は無視する。子供の悪戯にしてはこの声真似は高等技術すぎるし、町内会やシルバー人材センターのドッキリも有り得ない。

俺の恋の病は幻聴が聴こえる程、重症だったってことだろうか。

捨て切れない望みを託し、もう一度辺りを見回したがやはり雪絵さんの姿などない。肩を落として歩こうとした。

「池畑先生！ 下です下！ 電柱の下！」

下？ なんのことだろうかと乏しい灯りの電柱を見やれば、四センチ四方の段ボール箱があった。嘘。いつの間に？ こんなのがあったっけ？ こんな箱誰も気づかないなんておかしいでしょ。思わずしゃがんで箱を開けてみる。

「ひぎゃあっ！」

お化け屋敷でもビビったことがない、鉄の心臓をお持ちですねと言われたこの俺が、悲鳴を上げ、あまつさえ腰を抜かした。

だって、箱の中には体長十五センチくらいの精巧な雪絵さんフィギュアが……。いや、これ……。動いてるぞ！？ っていうか、なにこれ宇宙の神秘！？ 俺の妄想が作り出した超異常現象！？ 「よかったあ……。凍死するかと思いました」

パニックに陥っている俺をよそに、雪絵さんのミニチュアはホツと胸を撫で下ろしている。敷き詰められたタオルに身を包んでいるが、間違いない。全裸だ！

そりゃ寒いだろう。

なにこれどういうこと？ 昔、俺が子供の時こんなドラマあったよな。あれ最後どうなるんだっけ？ 主演してた女優さん最近見ないよな。愕然としながらも思考回路は目まぐるしい。

「雪絵さんですよね？」

確認のためミニチュアに尋ねると、ミニチュアは頷いた。

「はい。湯本雪絵です」

「こういう場合、交番ですかね？ それとも湯本さんところに直接お届けした方がいいですか？」

「ダメです！」

あ。ダメなんだ。

きつぱり言い切られて思わず納得したが。

「いや、ダメじゃないでしょ。俺正しい選択肢上げたと思いますよ」

「とにかくダメなんです！」

「なんでですか」

そりやお持ち帰りしたいですけど、どうしたらいいんですか。と
考えていたら。

「速やかに持って帰れよ」

頭上から子供の声が降ってきた。

なんだ駄のなつてないガキだな、と顔をあげると、金色の長い髪を下のほうで結った狐耳の露出の高い巫女服みたいな格好をした幼女が浮いていた。

「ええ……」

金色の瞳が俺を睨む。

「なんじゃその顔は」

「だって有り得ない事が起こりすぎていい加減疲れたよ」

「不甲斐ない男よの。せつかく千年ぶりに妾が現れたというのに。

むせび泣き喜べ」

「なんでよ。俺あんたのこと知らないし。その格好寒くないわけ？

その偉そうな口調からして神様とかいうオチなんだろうけどさ、それ以外ならどう考えたってそれ今流行りの萌え系のコスプレだよ

？ 俺の趣味じゃないけどね！」

「なにを言っておるのかさっぱりじゃが、神様というのは当たりじや。なかなか察しのいい男よ。その調子で速やかにその女子を持って帰るがよい」

「町の人にはれたらどうすんの。俺また変態扱いされて追い出されるじゃん。やだよ。この町気に入ってるのに」

「その女子が死んでもよいのか。ならば、なかったことにしてよいぞ」

「さあ、雪絵さん。俺の家でよかつたらおいでなさい」

金色のつり目で睨まれ、俺はミニチュアの雪絵さん入り段ボール箱を抱えた。

「ありがとうございます。池畑先生」

ミニチュアの雪絵さんが花のような笑顔を浮かべた。

異常現象その後。

六畳二間の木造アパートは、一階と二階それぞれ三戸部屋があるのだが、住人が二階の一番奥の俺と一階の真ん中に爺さんが一人しか住んでいない。

深さはあるが広さがトイレットペーパーのケース二つ分しかない風呂釜の狭い浴室と別に、無理やり水洗便所に変えてもらった和式の便所。もろ一人暮らし用の手狭な台所。

辛うじて住めるといった古きよき安普請アパートだが、家賃いろいろ込みで一萬八千円と破格なので、俺一人住むには問題ない。

照明器具がスプートニクで、チェアがイームズで、時計がネルソンので、家具がレトロフイーチャーなのは、前の家から持ってきたものだから、ボロ屋には不釣合いにモダンなデザインだとしても許されたい。

だって捨てるのもったいないじゃない。ベッドマットは二トリだけどね！

とまあ、こんな感じ俺の部屋に、五寸ばかりなると愛らしき人をお持ち帰りしたものの、雪絵さんは慣れない乗り物のせいで乗り物酔いになってしまった。クリスマスケーキよりも慎重に抱えて持ってきたはずなのにおかしいな。いや、それよりも。

「さて、狐娘。これはどういうことだか説明してもらおうか」

「それが神に教えを乞う態度か。護摩を焚け」

「どう見たって仏教系じゃないくせになに言ってるんだ。いなり寿司でも買ってきてやろうか、ごんぎつね」

「ぬうう！ 神を冒瀆する気が罰当たり者！ もっと妾を崇め奉れ！」

狐娘は悔しそうになにか印を結ぶように手を合わせたが、ピリッと首から肩に微弱な電気が走っただけだ。

「おお！ なんか楽！」

驚いたことにコリが解消されている！

「くぬうつつ！ 悔しけり悔しけり！ もっと妾に神通力があればお前ごときケチヨンケチヨンのギッタンギッタンにしてくれるのに！」

狐娘は俺の頭上で手足をばたつかせもんどりうつっている。

こいつは存在からお話にならない。

仕方ないので、雪絵さんに聞くことにしてダンボールの中を覗き込むと、彼女はタオルを身体に巻き付けてまだorzの形に横たわっていた。気絶しているっぽい。駄目だ。ここに話せる人間はいない。

— 先ず落ち着こう。

ワイヤーチェアに腰掛け、煙草に火を点ける。

これ、夢だよな。多分俺、今頃銭湯で湯あたりしてぶっ倒れてるんだ。うんうん。

「現実逃避か。うつけ者」

狐娘がようやく落ち着いたらしく、ふよふよと俺の右隣に浮いてきた。

「こんなファンタジックな現実からどこに逃げるんだよ。むしろこれが夢だっけのほうがよっぽどリアリティあるぜ」

「認める。これは現実だ。そのこの女子の願いを叶えたつもりが妾の神通力が足りなくてな、この有様じゃ」

「雪絵さんの願い？」

「人に教えてしまったら叶うもんも叶わぬであろう、馬鹿者が」

うわ、なんかイラッとした。

「じゃあ、それは置いといて、一体狐娘は雪絵さんをどうしたくてこうなったんだ？」

「企業秘密じゃ」

「うるせえよ。倒産寸前の零細企業レベルのクセして。そもそも神様商売するのは企業じゃねえだろ」

「うるさいのはお前じゃ！ 妾とて好きでこんな没九十九神になっ

たわけじゃない！ 妾はもともと妖力の高い白狐だったのだぞ！
神になるくらいすごいんだぞ！ それなのに最近の人間どもは信仰心を忘れたり捨てたり、地元の祠よりも知名度の高い方へ流れていたり！ おかげで妾たちのような地域密着型神は衰退する一方じゃ！ 神無月の出雲大社でどれほど肩身の狭い思いをしているか知らぬだろう！ 神の世は古より格差社会じゃ！ 古事記に載るような名家出身の神は別じゃが、その他の平の神々は嘲笑われていい見世物じゃ！ 人間どもは困った時に神頼みすればなんとかしてもらえると思いおつて！ なら妾ら没落九十九神はどうすればよいのじゃ！ 信仰心がなければ神通力も弱まり下等妖怪に格下げ。救いの手などありはせぬ！」

ぎゃんぎゃん喚いたかと思えば狐娘はべそべそと泣き始めた。
「神様つてのはなんだ、その、人気商売なんだな。零細企業とか言つて悪かつたよ」

だめもとでその金色の髪に手を伸ばすと、触れた。なにこれ、俺もしかして死期が近いとか？ 不安になりながら狐娘の頭をなでる。子供が泣いているのは、やはり忍びない。っていうか、営業頑張ってるのに売れないアイドルと言つたほうが近いかもしれない。

「その娘が現われなんだら妾も妖狐に逆戻りするところであつた」
狐娘もとい、なんか妖狐だつたらしい九十九神はかく語りき。

もともと湯本一族が氏子で、雪絵さんのお婆さんまでは、甲斐甲斐しく狐の祠を手入れしてくれていたのだが、息子の代になってから嫁、つまりは雪絵さんのお母さんが仏壇にしか手を合わせない人で、お祖母さんが亡くなった後は、狐娘に対する信仰心がさほどない親戚たちの足も遠退いてしまい、狐娘の祠も廃れかけ、神通力も弱まつたらしい。

唯一、小さな頃からお祖母さんとお参りに行っていた雪絵さんだけが、狐娘への信仰心を持ち、お祖母さんに変わって祠の手入れやお供え物を続けていたとのこと。そのおかげで今、こうして狐娘は存在しているらしい。

見た目は幼女だが、さすが中身は千年以上生きている神。年寄りらしく話が長い。

「婆が幼いその娘を連れて妾の存在を教えてなかったら、妾はとうに妖怪の類になっていた。だからこそ、その娘がいる間はあの湯屋を存続させんと守ってきた。あと、供物のぼたもち屋もな」

うっかり船を漕いでいたら、またピリツと電流が走った。

「あ。ごめん、話終わった？」

「神の声を前に居眠りなど不信心な！」

「うう……こっちは子猿相手に疲れてんだよ。んで？ 貴重な氏子の願いを叶えようとしたら、力不足でちっさくしちゃって道端に放置して、俺に拾わせて？ 何がしたいんだよ、あんた」

「ぬうう！ 妾はこの娘の縁結びをしようとしたのじゃ！ 決して放置などして居らぬ！」

小さな拳をぎゅうと握り、ぶんぶん振り回しながらきいきい喚く。マジ狐っていうか、職場の小猿と変わらない。

「っていうか、え？ なに？ 縁結びって、雪絵さんと、俺？」

なんだ、このごんぎつねいい奴じゃん！ 狐娘の握りこぶしをガツチリ握り、尋ねると、狐娘は顔を真っ赤にして怒り始めた。

「ぬうう！ 口が滑った！ 口惜しい！ 乙女の秘密は口外してはならぬのにいいい！！」

「だいじょぶだいじょぶ、ごんぎつね。俺と雪絵さんはもうガツチリバツチリ赤い糸で結ばれまくってるから！ ささ、雪絵さんの呪い解いて解いて！」

「できぬ！」

「はあ？！」

何言っちゃっててくれるの？

「心配しなくても超幸せにするしなるし！」

「真か？」

「真に。なんなら血判押すし」

真顔で答えたが、狐娘は難しい顔のまままだ。

「できぬ」

「な・ん・で？」

あまりにもきつぱりと言い切られて、そんなに信用がないのかと詰め寄ると、狐娘は泣きそうな顔で答えた。

「だから言つたる。神通力の大元である信仰心が足りぬと」

おっと、愛に障害は付き物とな。思い合っている俺と雪絵さん。

歳の差は五歳くらいのもだから問題ないが、体格差がありすぎる。これじゃーあんなことやこんなことができるはずがない。

「じゃあ、どうすんの」

「信仰心を集めるのじゃ」

狐娘は宙でふんぞり返っている。集めろって、待てコラ。赤い羽根募金じゃねえんだぞ。

「どうするんだよ」

「信仰の対象である妾がそんなこと知るはずもないだろう！ お前から人間が勝手に祀り上げてきたのではないか！」

「ええー……。俺、宗教とかカルトとか苦手なんだけど」

「知らぬ！ この娘と結ばれないならお前がどうにかしろ！」

狐娘は無責任なことをいってプライツとそっぽを向いてしまった。

確かに結ばれたいのでどうにかしたいが、まずこの状況はどうしたらいいんだ？

ミニチュアサイズで不可抗力で本人が望んだこととは言え、傍目から見れば、俺が人様の娘さんを拉致監禁してることになるわけで。また無実の罪に問われるのか？ やっぱりあのまま湯本さんちに戻せばよかった。

明日、雪絵さんが目覚めたらちゃんと話し合おう。

気絶している雪絵さんの為にエアコンの暖房を入れ、掛け布団の代わりに厚手のタオルをかけた。

もしかしたらやつぱり夢かも知れない。

もう寝よう。

ふて腐れた狐娘も明日になったらいいかもしれないじゃないか。

夢だ。これはきつと夢なんだ。
そう言い聞かせながら、ベッドへ入って目を閉じた。

やっぱり夢じゃない！（前書き）

長いので分けました。

やっぱり夢じゃない！

あー。喉乾燥してるな。加湿器入れとけばよかった。雪絵さん大丈夫かな。

目が覚めて寝ぼけた頭でそう考え、ハツとする。

夢だったらしいのにな！　　と顔をベッドの左側、ムラノタイルのローテーブルに向けると、あった。あったよ、段ボール箱。

自由が丘のアンティークショップで購入した二人掛けのソファには、やっぱり狐娘が。

緑を基調としたストライプのアメリカ製のそれにいかなる角度で観察しようとも似合っていない。

和風というべきか。和という字を冠しがたい風変わりな巫女服、へそ出しで腹が冷えないのだろうか。ノースリーブなのか袖つきなのか、肩と腕の間を縫うように赤い紐で結び止められている。そんな曖昧なデザインで、赤い襷のついた、本来なら袴と呼ぶ履物は膝上十五センチ丈で、白いニーソックスに、ヴィヴィアン辺りが出しそうな底の厚い真っ赤なストラップシューズ。センスおかしいんじゃないかと思うが、そこは神様クオリティ。俺の知ったこっちゃない。

元は妖力の高い白狐だったらしいのだが、九十九神に昇華したとえらい存在らしい。っていうか現役神様なら巫女服って違うね？

マジ神秘。神のセンス、マジ摩訶不思議。

ベッドから出て、箱の中を覗き込むと、雪絵さんは眠っている。

昨夜俺が掛けたままのタオル。寝相がいいんだなあと感心して、青白いほどの寝顔を眺める。うん、なんかヤバイ人みたいだよ。俺の冷静な部分が冷ややかな第三者視線を送ってくる。っていうか、マジ青白い。なんか、嫌な予感。

全神経を集中させ、細心の注意を払いそっと人差し指でその頬に触れてみる。小さすぎてよくわからん。

「雪絵さん、朝ですよ。雪絵さん」

等身大のこの状態の彼女を腕の中に収めて言いたい。

反応がないのは何ですか？

「雪絵さん」

無反応。

「おおいききやがれ狐娘！！ 雪絵さんの様子がおかしいんだけど！！」

ソファの狐娘の肩をがつくんがつくん揺らすと、狐娘は素っ頓狂な悲鳴を上げて俺の顔面に狐パンチを食らわせた。

「寝込みを襲うとは暴漢め！！ 妾の力甘く見るでないぞ！！」

ピリッ！

「肩こりは治ってたんだよ！！ いいから雪絵さんの状態なんとかしろよ！！」

「ふぎゃあああつ！ 妾に気安く触るでない！！」

「うるせえ！ こちとらガキになんのも感情も沸かんわ！！ いいから目え覚ませ阿呆狐！」

暴れまわるクソガキを押さえつけようとして我に帰れば、普通に幼女に襲いかかる変態の体勢だ。

ひとまず距離を置き、馬鹿狐を睨む。

「雪絵さんが起きないのは何故だ。ちよっとお前確かめる」

狐娘は俺をにらみ返し、何かブツブツ不満をたれながらもふよふよと低空飛行でダンボールを覗き込む。

「おい。娘。起きりゃ。これ娘……」

がしつとなんの躊躇もなく両手で雪絵さんを持ち上げると頬をつけたり、匂いをかいだりしている。

丁重に扱えよ！ っていうかなんかコレ、なんかのロボットアニメで観た光景。握り潰すなよ！ とハラハラしていると、狐娘がこちらを見た。

「何故目を覚まさぬ！」

「俺が聞いてんだよ！」

「うぬうう。死んでは居らぬが、いわゆる仮死状態じゃ。妾の神通力が足りぬので娘の活動力もごく限られておるようじゃな。しばらくすれば目を覚ますじやろうが、起きていられるのはほんの数分やも知れぬ」

真面目くさった顔で狐娘は推定した。

なんだよ、それ。

普通に引き合わせてくれれば、順調に物事は進んだはずなのに。こんなことが起きなければ俺だって時期を見て雪絵さんにアタックできた。

それなのに、こんな存在自体おかしな狐娘が現れたせいで無駄な障害が出来てしまった。

雪絵さんも雪絵さんだ。何故神頼みなんかしたんだ。

人の心は人が動かすものなのに。

神なんか不確かな存在に頼って成就した恋なんか、自分のものじゃない。

「なんだよそれ。なんでそんな中途半端な奇跡起こすんだよ。信仰心足りないの分かってたんだろ？ 神通力も殆どないの分かってたんだから初めから無茶なことすんなよ。九十九神なんかじゃなくて疫病神じゃねえか」

狐娘が金色の瞳を見張って、大粒の涙を零した。

「わ、妾は疫病神などではない！ 妾だって氏神じゃ、氏子の幸せを手伝おうとして何が悪い！」

「だからな、できないことはするなって言っただよ。悪いとかいとかの話じゃないの」

狐娘はソファの上につつぶせに突っ伏してヨヨヨと泣いている。

「まったく、千年以上生きていくせに、見た目通りのガキじゃないか。」

すぐべそべそするし、これが神か？

呆れてフオーする気も起きない。

出来そこないの奇跡より朝の時間は貴重なんだ。

俺は狐娘を放置して出勤準備にとりかかった。

「じゃあ俺仕事行くから雪絵さんのこと頼むぞ」

うーん。これも神頼みになるのだろうか。狐娘はまだ突っ伏したままベそをかいていた。

神隠し騒動勃発。

勤務先の小学校まで約五キロ。人生の折り返し地点に近い俺が歩くはずがない。

全校生徒が五十以下人で、俺が担任しているのは、一年生六人と二年生八人。一つの教室の前後に分けて、黒板とホワイトボードを使って、授業を行う。

後部席の二年生に復習のプリントを配り、それをやらせている間に一年生に教科の指導をし、ノートを書いている間にプリントを終わらせた二年生の指導に取り掛かる。『復習』『課題』『実行』『理解』『復習と応用』を一年生と二年生の間ですらしながら進行させる。

或いは国語や理科、図工なら一年生の教科書から半分、二年生の教科書から半分ずつピックアップして学習し、次の年に残りの半分のやるといったやり方もあるらしいのだが、俺はやっていない。

僻地なので以前の学校よりカリキュラムに対する概念は緩い（なわけではない。）おかげで、計画通りの進度で実行していくが、年度当初計画は帳簿上だけの話で個別指導も行う。

昼休みには、夏なら近くの川で遊びたがる生徒もいて、結構怖いが付き添ったりもする。今のところ一二年生は全員仲が良く、課外授業で屋外に行っても引率が楽だ。

夏休みの宿題に一人一人の弱点に合わせて違うプリントを作成したり、カリキュラムの内容に合わせていくのは少々厄介だが、やり甲斐はある。

幸い、変にませた生徒もいないので以前に比べると随分楽しい。子供は嫌いではないのでこの仕事は好きだ。

さて、今日はどんな一日になるだろうなと考えながら、車にキーを差し込んでいると背後から階下の爺さん、山中さんに声を掛けられた。

「おはよう先生。昨夜から風呂屋の娘が行方不明なんだと。あんた知ってたかい？」

「サーツと血の気が引くのがわかった。さすが田舎。ご近所ネットワークが電子メールばりだ。」

「ええ？ 本当ですか？ 行方不明なんて物騒ですね」

「家にいますけどね。とは言えず、白々しい台詞を口にした。」

「いやあ、家の裏の山にいったつきり姿がみえなんだと。神隠しかつて皆騒いどるよ。都会から来た先生には神隠しなんかわかる？」

「数年前にそんなアニメ映画がありましたね。神隠しにあった少女が名前を取られて湯屋で働かされるんですね」

「山中さんはわかっていているのかいないのか微妙な反応で何故かワハハ！ と笑い飛ばす。」

「若い人も神隠しはしつとるんなあ！ いやな。今、銭湯の親父と町役場の人らが探しに出とるみたいでな、わしも暇なもんで行こうかと思つとるんですけどね。もし先生も見かけたらすぐ帰るように言つてやって！」

「わかりました。明日は休みなのでなにか私にも手伝えることがあればおっしゃってください」

「言いながら冷や汗と胃痛が阿波踊りだ。数年前の事件でも真犯人が一般人を装っていたというのがあったが、いや、人とはげに恐ろしい。」

出勤時間を言い訳にして山中さんと別れ、車に乗り込む。

今回ばかりは身に覚えのないというわけでもない。

運転席で煙草に火をつける。深い息をつくと心臓が暴れまくっているのがわかった。後ろめたさと罪恶感で重くなった胸に無理やり煙を入れたが、落ち着けるはずがなかった。

煙草が切れたので、家から車で三分くらいの煙草屋に立ち寄りことした。

今どれだけの騒ぎになっているのか気になるというのもある。八十くらいいってそんな耳の悪い老女だが三ヶ月の間で俺の吸う銘柄

を把握している。

何も言わなくてもカウンターの向こうの座敷から俺の煙草をワゴンカートンだして、ふごふご言いながら（実際はありがとねと言って）金を受け取る。

だが今日は違った。

「しえんしえ。雪絵ちゃんが居らんようになったの知つとるけ？」

ふごふごと口をもごつかせながら訊いてきた。

「さっき山中さんに聞きました。神隠しだそうで」

「んなあ。わしらが子供ん時はちよいちよあつたんけどー……」

遠い思い出に時が止まったのか、或いは心臓が止まったのか、老女は俺の背後を見遣ったまま一時停止した。

「狐じゃあああ！！！」

齒のない老女の絶叫に、ビクウツと身体が竦み上がり、地面から三ミリ浮いた気がした。

更に暴れまくる心臓辺りを手で押さえて振り向くと、狐娘がふよふよと浮いている。

「なんじゃこの婆。妾の姿が見えるのか」

煙草屋のお婆さんは土下座のような体勢で両手を合わせてふがふが言っている。たぶん念仏でも唱えているのだろう。

「妾は阿弥陀ではないでの」

腰に両手を当てて踏ん返り返っているが老女には聞こえていないようだ。

俺は狐娘に寄り、怒鳴りたいのを堪えて小声で話しかけた。

「なんでここにいるんだよ！」

「雪絵が目を覚ましたぞ。腹が減ったらしくての。食うものを探しに山に戻るうとしたらお前を見かけたでの、さっきの仕返しに驚かしてやるうと思っただのじゃ」

「脳天気な氏神様だな！ 今町じゃ神隠し騒動勃発だ！」

「その通りである」

蠅の要領で叩き落してやりたい。

「どうしてくれんだよ！ もしこれで俺の部屋から雪絵さんが発見されたら俺は犯罪者になるんだぞ？ 悪者の変態扱いだ！」

「神隠しじゃ。お前のせいではない」

狐娘はよく見ると、充血していた。泣き腫らした瞼でニツカリ笑った。

「雪絵とて惚れたお前を悪者に仕立て上げるはずがないではないか」

「そうはいつでも周りはそう思わないんだよ！」

「そう案じるな。この界隈の古い者どもは元は妾の氏子たちじゃ。きやつらはそんな人間ではない」

「信仰心が薄れて神通力がない氏神のクセしてよくそんな自信持てるな」

「信じるものは救われると異国の神が教えておったぞ」

「そういうのバクリっていうんだよ」

悪態をついたものの、狐娘があんまり無垢に微笑み、金色の髪が朝日でキラキラ光るので、ちょっと神々しさみたいなものを感じてしまった。

「妾みたいな人気のない神を信じたくないならそれでよい。だがな、男。惚れておるなら雪絵を信じてやってもいいのではないか」

狐娘は神様みたいな尊い教えを説き、少し寂しそうに笑った。

女狐神（めこがみ）様である！

「悪かったよ。疫病神なんて言つて。お前のいうとおり雪絵さんのことを信じる。んで、お前のことも認める」

やけにしおらしい狐娘に免じて先ほどの暴言を詫びると、狐娘はキョトンとした顔をした。

「なんだよ」

「いや。なんじゃろう。なんだ」

「俺が聞いているんだつてば」

「ぬうう。ちよいと男。二礼二拍手一礼せい。そして名を申して何か願を掛ける。住所はよい。家は知っておるでの。手水もこの際赦す」

偉そうなのは神様だからだ。うん。こいつただの小娘ではないんだ。

自分に言い聞かせ、いわれたとおりにした。

二回頭を下げ、二回、拍手かしてを打つ。

（池畑昂志。願いは雪絵さんが無事に元に戻りますように）

一礼して顔を上げると、ん？ 見間違いか？ 心なしか狐娘が縦に伸びているような……？ 五等身くらいだったような気がするが五・五等身くらいになってんじゃないか？

「己自身でなく雪絵の無事を願うか。よい心掛けじゃ。池畑昂志よ」
狐娘が微笑むとザワツと風が吹きぬけ、言い知れぬ感覚が身体を巡った。

「妾は荒野恩姫あれのめくみひめ。主の願い、しかと聞き入れたぞ」

甲高い声が鼓膜に響いた。それは決して不快なものではなく、心が澄むような尊い響き。

「女狐神様じゃ！ 荒野様がお見えになった！！」

キシヤーツと喉の奥の痰を捻り出すかのような老女の絶叫に、思わず彼女の心臓を思いやる。

「おお！ 思い出した！ あれは千代ではないか！ 妹背になった幼馴染が戦争に駆り出されたときに妾の所に百度参りをしに来た娘！」

「もう娘じゃねえだろ」

「すっかり変わり果てたでな。一見わからぬかったわ！ あのころはまだ神通力も漲っておったし、あれの夫は黄泉から呼ばれてもおらんかったからなんとか叶えてやれたが、いくら力があっても命の定めが決まった者は救えぬでな。湯屋の絹には残念じゃったが……」

「しみりしだした荒野を引っ張り、泡食ってる老女にすつとぼけて今日はいい天気ですねといいながら、そつと煙草屋に近寄り、支払済みの煙草を手にと二三歩後退り、そのまま踵を返して車に走った。」「さすがは地域密着型神様、知る人ぞ知るって奴だな」

助手席に荒野を乗せて車を発進させると、荒野は不思議そうに窓に張り付いている。

「昂志！ これに乗ったのは初めてじゃ！！ すごいおう！ 天尊あまみことの牛車より速さは劣るがなかなか乗り心地がよいではないか」

「そりゃよかった」

神というよりやはり子供だがなかなか愛らしいじゃないか。

「つていつか、荒野。雪絵さんが腹空かせてるって言ってたなかったか？」

大事なことを忘れていた。一瞬、横目で見遣ると荒野はニヤツと笑った。心なしか視線が大人っぽい？

「喜べ昂志。おぬしが妾を信じたおかげで神通力が少し増えたぞよ」「有り難く思えよ」

「神様に向かつてなんじゃその言い草、何様じゃ！ 妾のほうがいんじゃぞ！ まあ、良い。雪絵なら今しがた妾の使いを送った。

あれが雪絵の面倒を見ておる。案ずるな」

「使いがいるなら最初から出してくれりゃいいのに」

「不気な神じゃったからの。使いも封印しておった。ここ十数年一人ぼつちで自転車稼業って奴だったでの」

「十数年も一人ぼっち……。そりゃ寂しかったろ」

「千年以上生きてる妾からすれば十数年なんぞ僅かなものよ」

「強がるなよ。すぐ泣くくせに」

また怒るかなと思いつつ、左手を伸ばして荒野の頭を撫でる。狐パンチはくりだされることなく、荒野は大人しく俺の手を頭に乘せていた。

「真、神をも恐れぬ奴じゃ」

荒野は呆れたように言ったが、くすぐったそうな声を上げて笑った。

「まさか荒野。このまま職場について来るつもりか？」

「神が憑いてくるのだぞ！ お前こそ有難く思え！ それに妾の姿は人には見えぬ！ 千代は特殊だったが普通は気づかれぬものなのだ」

「ええー……？ それ信じていいのか？」

「妾を信じぬなら雪絵の世話役も消えてしまっぞ？」

「なんだよ半端な脅し文句だな。もう俺は荒野の存在を信じちゃってんだから、ちよつとやそつとじゃ消えないよ」

「ふふん。言うではないか。ま、神通力が戻ったら、お前なんかイチコロじゃ。その澄ました顔がべそそのへにやへになりながら妾の神々しい麗しさに平伏す姿が目につかぶわ」

「よく言うぜ。ま、せいぜいそうなるように荒野も何か打開策を考えておいてくれよな」

「わかつておる！」

俺の手を払いのけ、荒野はふんつと鼻を鳴らした。

女狐神様とワケあり先生。

荒野に黙っておくように言い含め、慌てて職員室に入ると、教員会議の途中だった。

頭をさげつつ間に入る。会議と言っても、本日の教科進行の確認や生徒に告げる連絡事項を予め教頭から指示される朝の会の教師版のようなものだ。

朝礼はすぐに終わり各自席に戻りプリントや課題をまとめに入る。

「おはようございます。こんな時間に珍しいですねえ。池畑先生」

「おはようございます。いやあ、寝坊してしまいました。ギリギリセーフ、ですかね？」

隣席の3、4年生担当の村松先生に話しかけられ、答えると彼女ははくすくす笑って頷いてくれた。

彼女は地元の人で念願叶えて母校の教諭になったそうだ。

清潔そうな黒髪を一つにまとめており、温泉地の女性らしく雪絵さん同様化粧つけはないが肌のきれいな色白さんだ。顔立ちは地味だが素朴な愛らしさがあり、物腰も柔らかかで人当たりもいい。三つ年下の頼れる先輩だ。

「出掛けに近所の方から聞いたんですけど、湯本さんの娘さんが昨日から行方不明だそうで、ちょっととした騒ぎになっているんです。神隠しとかって」

自分ちに困つといてよく他人事のように言えるな、と我ながら感心する。

荒野のおかげで平常心が取り戻せたのだが、もしかして犯罪者の素質でもあるんじゃないかと不安になる。

「そうなんです。さっき教頭先生からもそのお話があつて。生徒達にも呼びかけようと思ってるんです。雪絵ちゃん、なにがあつたのかしら……。今頃どうしてるのか私心配で心配で」

村松先生は急に枯れた百合のように背を丸めてしまった。安心し

て！！ だいじょぶだいじょぶ！！ 雪絵さんは一応無事だよ！
とは言えないので平静を装って話を促す。

「湯本さんとはお知り合いですか？」

「雪絵ちゃん私の友達です。というより妹みたいに思っています。地元に残っているのも私と雪絵ちゃんくらいで。よく一緒に隣の県のショッピングモールに行ったりしてるんですよ。雪絵ちゃん私と違って可愛いから、物騒な人にさらわれてたりしたらどうしよう…」

…」

きゅうつと下唇を噛み、黙り込んでしまった。うあああ。村松先生青くなってる！！ やべえ！ すっげえ罪悪感。俺、比較的物騒ではないんですよ！！

「雪絵さんはきつと大丈夫ですよ、村松先生。この土地の人には女狐神様とか言う立派な神様がっているんですよ？」

さりげなく荒野の存在もチラ見せしとかなくちゃ、信仰心ゲツトには地道な下積み！ 勧誘したことなんてないからよくわからんが。荒野がでかした！ と膝を打ったのでいいんだろ。

「めこがみさま……。確か、祖母がそんな話をしていましたけど、どうして池畑先生がご存知なんですか？」

村松先生は不思議そうな顔で俺を見る。隣にいますから。とはやはり言えず。煙草屋のお婆さんから聞きましたと無難な回答をしておいた。

「ああ。なるほど。そういえば雪絵ちゃん、裏山の神社に小さな頃からお参りしてたなあ。女狐神様は縁結びの神様らしいんです。男女はもちろん、人と人の心を繋いでくれる優しい神様みたいですよ。祖母が教えてくれたのにどうして忘れてたのかしら……」

「そうなんですか。なら、今度俺もいつてみようかな」
行かなくても本体はここにいるんだけど。さくらださくら。

「あら。池畑先生にもそんなお相手がいらっしやるんですね」
優しい眼差しを細め、彼女は小さく息をついた。

「私もいつてみようかな……。やだ。こんな時に不謹慎ですよね」

村松先生は慌てて顔を引き締めた。

「でも、やっぱり村松先生も気をつけたほうがいいですよ」

「え？」

「雪絵さんだけじゃなくて、村松先生も充分可憐な女性なんですから」

卑下するのはよくないよ！！　そう心の中で言いながら、ねっ、と笑いかける。

「そ、そんな私なんて……」

謙虚な彼女らしく村松先生は首を小さく横に振ると、微かにはにかんだ。

「そうですね！　村松先生！！　気をつけるべきです……！」

俺の肩をぐっと掴んで間に割り込んできたのは、五、六年生担当の風間先生。

三つ年上の、地元の名士の三男坊で、この辺りじゃ珍しいらしい東京の大学を卒業したことが自慢、いや、銀座で購入したという某有名ブランドの時計も自慢していたな。眼鏡もだ。あ、スーツも。

だがそんなことはどうでもいい。こいつも色白だが、残念なぽっちゃり系で、せめて痩せれば古いタイプのイケメンになりそうなおつちり二重だが、お坊ちゃん臭が抜けきれない。歓迎会のときに東京の話振ってきたので答えたのだが、大学の話をしてからかなり目の敵にされている。なんやかんやめんどくさいので俺は村松先生に挨拶をして席を立った。

「人は見かけによらないのです。ちよつとばかり見た目がよくても、生徒に手を出すような悪魔のような男だって存在するのですから。」

ねえ、池畑先生」

追っかけてきた声に、頭が冷たくなるほどの怒りが沸き立った。

「なんですか池畑先生。怖い顔してどうしたんですか？　あなたのことじゃないのでしょうか。身の潔白は証明されている。教頭もそうおっしゃったじゃないですか」

風間先生に向ける目に力が籠っているのは自覚している。彼は俺

を愉快そうに見返し、わざとらしく肩を竦めた。そうだ。俺は潔白だ。だがしかし、こんな風に言われるのは許せない。俺自身のためはもちろんだが、あの子の想いをこんなくだらない引き合いに出されるのは癪だ。

笑え、俺。右手に震えるほど力が籠る。笑え。

「どうもすみませんね。人より、いえ、誰かさんより股下十五センチ長くて、ちょっとばかりイケメンなもんで、てっきり俺のことかと。まあ、風間先生もご存知のとおり生徒に手を出すほど異性関係に困ったことはありませんし？ そんな噂気にすることじゃありませんよ。では、俺は安心して先に教室に向います」

足早に退場した職員室の少ない教員達の沈黙は痛いほど重かった。

「罪な男じゃの」

「なんでよ。俺無罪なんだけど」

俺の左肩付近を浮いている荒野の声が頭の中に直接響いた。答えてふと足を止めて荒野を見る。なにこれ。

「声に出さずとも妾と会話できる。神通力じゃ。ついでにお前の思考は筒抜けじゃったし、秘めた過去も見えた。難儀であつたの。安心せい。妾は口外せぬ」

雪絵さんの前例があるのでいまいち信用ならないが。

「どうせ今の妾の姿も声もお前と雪絵にしかわからぬ。気にするでない。雪絵には黙っておく」

ならいいけど。あのことは、本当に口外されたくない。

「しかし、昂志。お前の何気ない優しさが時として仇になる。妾に言われずとも自覚して居るだろうが、どうもお前は無意識に女子をその気にさせるでな。村松早苗もやぶさかではないぞ。もっともあれのことじゃから厄介には至らぬであろうがな」

「池畑先生」

昇降口のところで息を切らした村松先生に呼び止められた。

「村松先生……。あ、先ほどは見苦しいところをお見せして申し訳ないです。大人気ないのはわかっていたんですけれど」

なんでこんなとき照れ隠しに頭をかくのだろう。ばつが悪く、手持ち無沙汰だからだ。

「いいえ。あの、できれば風間先生のこと悪く思わないで下さい。私たち教師が険悪だと子供達にも影響してしまいます。子供達は敏感です。それに風間先生あんなこと言いますけど、根は悪い人ではありません。確かにちよつと幼稚なところが抜けきれてませんけど、でも本当に悪い人とは言い切れないところもあるんです。若干心が狭いところはあるかもしれませんが、どうか憎まないであげてください」

「村松先生、ちよいちよい辛辣ですね。それに的確な洞察力をお持ちだ」

苦笑すると彼女は、あ、と口元を手で押さえ顔を赤らめた。

「すみません。私たち兄弟みたいに育ったものですから、どうも遠慮できないというか齒に衣は着せられないというか。貶めるつもりはないんですよ」

困ったように笑い、小さく肩を竦めた。

「わかっていきます。ほら、俺、ちよつとばかりイケメンなもんで妬まれ易いんですよ。彼もその一人だと思っています」

おどけて見せると村松先生はころころと笑ってくれた。

「でも。これだけは解っていただいたいですけど、私たちは池畑先生を信じています。子供達はともあなたに懐いていますから」

「はい。ありがとうございます」

村松先生に笑顔を向けると、彼女も笑って頷いてくれた。

女狐神様の御乱行！！

朝礼開始の予鈴に急かされ、俺と村松先生は慌てて階段を駆け上った。風間先生は教頭にこっぴり絞られている最中らしいので遅れるそうさ。荒野は当然の如く俺の傍に浮いているが、村松先生は気づいていない。これなら大丈夫そうさ。

信じてるって言われると心強いな。

「そうである」

耳の後ろ辺りで荒野が頷くのがわかった。本当にここに赴任できてよかった。

教室に駆け込むと、子供達が元気な挨拶とブーイングをくれた。

「おはよう！ ごめんな！ 先生が遅刻しちゃったよ。放課後校庭十周するけど、皆見てくれるか？」

見る見るー！ と口々に騒ぎ、きゃっきゃと笑う。

「よーし、じゃあ、先生頑張るから皆席に着いてー。朝礼始めよー」
皆が席につく中、一年生の田所正太郎だけがポカンと口を開けたまま俺の方を見ている。

「……どうした、正太郎？」

嫌な予感が拭えないが貼り付けた笑顔で尋ねて見ると、正太郎は前歯がない口を動かした。

「せんせーの横に黄色いかみのへんてこの女の子がいる！」

バリバリ見られとるやんけ！！

きゃあつと教室内が騒がしくなる。

「誰がへんてこじゃ！！ こんな愛らしい神はなかなか居らぬぞ！！」

「うっそ！ 先生の横に何だっつて！？ ぜんっぜんわかんない先生せんっせんわかんない！！ うっわこっわー！」

「こわくないよー。女の子だもん。おれのほうがつよいぞ！」

「そっかそっかー。んーじゃあ、正太郎もその子と一緒に勉強し

よーな」

正太郎の頭をがしがし撫でて席に着くように指示すると、正太郎は荒野に向かって笑った。

「一緒にお勉強する？」

ちらりと荒野を見遣ると。

「妾にわからぬことはないが正太郎がしたいのであればつきおつてやるぞよ」

と荒野は踏ん返り返った。叩き落とすぞ。

「狂暴じゃのー。昂志は。ほれ正太郎。妾を案内せえ」

声は聞こえてないらしく、正太郎はよくわかってない顔をしながらも荒野が差し出した手を引いた。

「うそだうそだ見えないもん」

「正太郎のウソツキー」

「うそじゃないもん。ここにいるもん」

二年生の林友則と池田充に囃され、正太郎は泣きそうな顔になって荒野の手を握った。

「そうじゃそうじゃ妾はここにおるー！」

荒野は鼻息荒く主張しているが、声は俺にしか聞こえてない。仕方ない。

「あつ！先生にも見えた！狐耳のへんてこな服きた女の子！」

「へんてこな服じゃと！？」

苦肉の策も虚しく。嘘だ！先生、正太郎のことえこひいきしてる！ずるいずるい！教室の中は大騒ぎだ。

「よつし、じゃあ！先生が絵に描いてやる！それにえこひいきなんかじゃなくて、先生はその子とお話も出きるんだからな！！」

嘘ついてないもんね！俺はペンを取りホワイトボードに絵を描いた。

ぶつちやけ絵だけは苦手だ。一生懸命描きあげた似顔絵を見た荒野は憤慨し、子供達は笑い転げた。

「妾はそんな目ん玉オバケではない！！！」

「せんせい絵―下手くそ―」

正太郎まで不満げに口を尖らせた。

っていうか、なんか神通力で神秘の現象起こせよ。横目で荒野を睨むと、おお。と膝を打って、ヒョイツと飛び上がる。

「うぬぬぬぬ！　しおしおのばあ！」

それ快獣！！　それパクリ！！

ぼんつ！　と間抜けな音がして。狐耳のなくなった相変わらず妙ちきりんなコスプレの幼女が床に着地した。その瞬間の子供達の絶叫ときたら超音波並みだ。よくガラスが割れなかったなと耳を押さえたま思った。

「これでどうじゃ」

「馬鹿狐！　なんで実体化なんかしたんだ。おかげでよけい大騒ぎじゃねえか！！」

「なにやってるんですか！！」

騒ぎを聞きつけた村松先生が勢いよく引き戸を開け一喝した。

ぼんつと荒野は煙になり再び皆の前から姿を消した。興奮した子供達が村松先生に群がり各々今起こった現象について口走っているが伝わっている気配はない。

「忘却の印」

荒野が手早く様々な形に両手を結ぶと、糸が切れたように子供達が黙り込んだ。

「あれ？」

「あら。どうして私ここに？」

子供達だけではなく、村松先生も忘却の印が効いたようだ。

「どうしたんですか？」

強張る頬で笑いながら尋ねると、彼女も不思議そうに首を傾げた。「い、いえ。どうしたのかしら。私……。教室に戻らなくちゃ」

村松先生はまさに狐につままれたようにしきりに首をかしげて出て行った。

なかなかやるじゃないか。

「千代と早苗が妾の存在を思い出したでな。神通力が僅かながら戻ってきた」

……荒野、やっぱり、またでかくなってねえか？

「本来の姿に近づいておるのじゃ。昂志、元の姿に戻った妾に惚れても知らぬぞよ」

ほほほほ、と十二歳くらいのクセにやけに妖艶な微笑を浮かべる。惚れるわけねえだろ。

「ふん。偉そうにしておられるのも今のうちじゃ。妾の本領発揮したらお前なぞイチコロじゃ！」

あーはいはい。授業始めなくちゃ十五分も出遅れた。大体俺は雪絵さんのために荒野の信仰心を集めてるんだつつの。

「わかっておるわ。妾がその気はなくとも昂志が妾にコロっといかぬか心配じゃての」

どれほどの美人が知らないが、服のセンスがゴットオンリーノウズな人外、知り合い程度に収めたいわ。

「うぬうつつ！ 後悔しても知らぬぞ！ ぼんきゅっぼんの絶世の美女神じゃぞ！」

しないしない。もしもの時はそんな悔い改めるわ。ぼんきゅぼんだと？ 遮光器土偶かつつうの。

「ぬうつつつ！ 妾を虚仮にしたこと今悔い改めよ！」
ドンツと全身に鈍い衝撃が落ちた。

膝が崩れ、意識が朦朧として顔を床に打ちつけた。

子供達が悲鳴をあげ、荒野がぎゃんぎゃん喚いている。

「昂志！！ 死んではならぬのじゃ！！ 黄泉神！！ うっかり帳簿に名を書くでない！！ 消せ阿呆！ 昂志！！ 死んでは嫌なのじゃあつ！！」

ぼろぼろ大粒の涙をこぼしながら俺にしがみつく荒野。神様のクセに泣き虫過ぎる。っていうか、コレお前の仕業だろ。校庭十周やれないわ。子供達との約束どうしてくれんだよ。

俺の意識はそこでぷつりと暗転した。

なんでか警察庁から来た男。

目覚めると、俺は自分の部屋にいた。どうやってここに運ばれたのだろう？ うわ！！ もしかして雪絵さんのこと誰かにバレた？！ がばつと身体を起こすと、きやつと小さな悲鳴が聞えた。起き上がった俺の腹の辺りに荒野と似たような妙ちきりんな服を着た雪絵さんが転がっている。

「うああ。大丈夫ですか」

思わず両手ですくい上げ、その姿を凝視する。……あれ？ なんだ、この服……、雪絵さんが着てるとなんかエロスが溢れてるぞ！ 湯！

「大丈夫です。よかった。荒野様もとても心配されてました。今しがた泣き疲れてお休みになりました」

キュウ！ と甲高い獣の鳴き声がして雪絵さんの近くに、狐っぽい仔犬よりちよい大きいサイズの空飛ぶ生き物が寄ってきた。

これが使い？ 風の谷のなんとかに出てきたリスだかキツネだかみたいな小動物じゃないか。てつきり荒野みたいな人型の何かを想像していたのだが。

「イカツチちゃんです。よろしくね」

雪絵さんは小動物に跨りにつこり笑う。

「よろしく、いつて！！！」

手を差し出すと小動物に思いつきり指を噛まれた。

「イカツチちゃん、この人は味方よ。怖くない」

小動物は雪絵さんに宥められながらも俺に対する警戒と威嚇をやめない。

「ほらね！！ 怖くない！！ ねっ！！！」

俺は半ばやけくそで言ったが、雪絵さんに乗せたまま小動物は横たわった荒野の方に逃げた。

「大丈夫ですか？」

「たいしたことありません。それより、俺はここにはどうやって？
雪絵さんのことがばれて今頃町の皆さん大騒ぎなんじゃ？」

「いいえ。大丈夫です。一度救急車で病院に運ばれたとの事ですが、
夜中に荒野様がこちらへお運びになりましたし、荒野様のお力で皆
さんはただ池畑先生が心労からお倒れになったと思っっています」

「まあ、いいか。雪絵さんも比較的無事だし。とりあえずばれてな
いし。雪絵さんが着るとその服も可愛らしいですね」

「やだ。池畑先生ったら、お上手」

雪絵さんは赤くなつた頬を両手で抑えてモジモジしている。

そりゃ愛しい人ですから何でも可愛らしいんですけどね！ とほ
くそ笑んでいると、玄関の呼び鈴がなつた。

こんな朝早くから誰だろう。

「はい？」

回覧版だろうかと少し警戒しつつもドアを開ける。

ガツと磨き上げられた革靴が隙間から差し込まれた。

焦つたので反射的にドアを閉めようとすると、ドアを抑える手が
ガシツと現れ、それらの主がヌツと顔を出した。

「ぎゃあっ！」

思わず悲鳴を上げてしまった。黒い艶のあるオールバックに、死
んだ魚のような黒目勝ちな切れ長の瞳、生気の乏しい肌色。目がや
けにインパクト大。鉄の心臓をお持ちですねと俺を評した張本人。
こいつに雪絵さんのことがばれると厄介だ。いや、誰にばれてもヤ
バいけど！

「先輩……、ひどいじゃないですか……。ボクですよ。大神おおがみ
大和です」

「わかってるよ！ わかっているから手え離せ！」

「ダメです。事件の臭いがしますから」

「はあ！？ なななに言ってるんだ」

「くせ者じゃ……！」

背後から素つ頓狂な叫び声がした。お前のほうがくせ者だ……！

「ほらやつぱり」

ガバツと俺ごとドアを引つ張りあげ、大和は言った。

「え……？ あれ？ お前も見えんの？」

荒野は普通の人間には見えないはず。もうすでに二人見えた人間がいるので信憑性は皆無だが。

大和は一度俺の向こう側を見て、俺に微笑むと当然のように言った。

「エリートですから」

「関係ねえよ」

「なんじゃ貴様は！」

珍しく荒野が威嚇している。

「俺の高校時代の後輩だよ。剣道部で一緒だったんだ。大学は別だったけどな」

「元・警察庁刑事局捜査第一課の大神大和です。今日付けでこちらの町に配属してもらいました。よろしくね。キツネちゃん」

と手を差し出すが荒野は威嚇をやめない。イカヅチも雪絵さんを庇うように背後に回して低く唸っている。

「つて、なんで！？ 出世は！？ それ左遷だろ！？ なにやらかしたんだ！？」

大和は再び微笑むと、得意げに言った。

「エリートですから」

「いや、左遷だから」

「先輩がいる町だから移動願いを出したんですよ」

「なんで」

「面白そうな匂いがしたからです」

「犬か！」

「狗じゃ！」

「大神です」

大和はさらりと答える。

「もしかして大和、こいつの言ってることわかるのか？」

「はい。エリートですから」

「もうどこにエリートが関わってくるのかわかんねえよ。一般的に言えば超常現象だろ。これ」

「先輩って面白い方だと思っただけなんですが、やっぱり面白いですね。こんな上級九十九神を手なずけるなんて普通の人間ならありえません」

「上級なのこれ」

「もともとが位の高い白狐ですよ。白い九尾狐なんてそうそうお目にかかれるものじゃない」

「警察の上層部は日本昔話も詳しいのか」

「だから、僕はエリートなんですから」

もうエリートがゲシュタルト崩壊。頭痛くなってきた。

「妖力が殆どないのによく人間をこんな姿にできたね」

俺を盾に背後で大和を睨んでいる荒野をじっと見る。塗りつぶしたような漆黒の瞳が怖い。

しかも、ちょうど大和は俺より10？高い191cmなので140ちよつとの荒野からすれば威圧感も半端ないだろう。

「大和。荒野がビビってるだろ」

「何をおっしゃいます。僕だって彼女にビビっていますよ」

「嘘つけ」

「昂志。こやつ本当にお前の知り合いか」

「だから、後輩だって」

「ならばこの禍々しい気はなんじゃ？」

二人の間に挟まれている俺の全身は何故か鳥肌全開だ。なんだこの冷たい空気。

「丁度いい機会ですね。先輩この女狐が見えるんですよね？」

「女狐言うでない！！」

喚く荒野を抑えて大和に向き直る。

「ああ。喋ってることもわかるし、二度落雷落とされて、昨夜は初めて死にかけたよ」

「よく生きていられますね。ああ。だから微かな瘴気を帯びているんですね。おかげで居所掴めましたけど」

「なんだよ。さっきから言っていることが意味不明なんだが丁度いい機会ってなんだ」

「僕の秘密を先輩に打ち明けます」

大和はゾツとするほど不気味な笑みを口元に湛えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081ba/>

あなたの部屋に神隠し

2012年1月8日00時54分発行